

# 私の保育

## —保育者二年生の記—

桑田 幸子

何もかもが初めてだった年少組の一年間。子どもたちにとって、私にとっても、ピンクのスモックを着るのも、皆でお弁当を食べるのも、夏休みも運動会も遠足も、叱るのも叱られるのも、悲しむのも喜ぶのも、幼稚園という、何だかよくわからない世界で、それぞれに初めてのことがたくさんありました。ようやくお互いに構えや遠慮がいらなくなり、一緒にいること、遊ぶことが楽しみになった、そんな子どもたちと、「おおきいくみ」になれるのは、私にとって、不安よりも楽しみの方が、ずっと大きいようでした。

四月に、「ちいさいくみ」が入園してきました。そして、二十五名の子どもたちと私は、「ふじ組」から「うめ組」になりました。はしゃいだり、泣きべそをかいだりしている新入園児が、私にはとても小さく見えました。それと同時に、「一年前は、うめ

組の子どもたちもこのようだったかしら……」と、子どもたちの成長を感じたり、本当に大切な時を、うかつに通り返ぎたように感じたりもしました。四月、五月という時期は、子どもたちが、「おおきいくみ」になったことを、何よりも肌で感じたようでした。そして、保育者から見ても、子どもたちは、なるほど「おおきいくみ」だったのです。

### つげの木と女の子

あまり友だち関係が開かれていない女児がいます。どこか活力がなく、気になる一人でした。私と一対一では、よく話しよく遊び、心を開いてくれるのですが、友だちとの関係ではなかなかうまくいきません。そこが気になる私は、彼女と遊びながらも、他の子どもたちも仲間になるようにと、願ったり試みたりしました

が、思うようにはいかないものでした。いつしか、庭の中ほどにあるつげの木が彼女の氣に入りの場所になりました。最初は「木に登りたい」と、私の手を借りて登り、下りる時も、私に抱かれて下りていました。何日もそれが繰り返され、一人で（独力で）登れるようになりました。もちろんそれは、彼女にとっても私にとっても、とてもうれしいことでしたが、やはり下りるのには、私の手が必要でした。独力で登れるようになった彼女は、前にもまして、よく木に登るようになりましたが、そのたびに、私はつげの木に、くぎづけになりました。次々に他の子どもたちが「タカオニしよう」「ごちそう食べにきてね」と、私の所へやってきました。私は一緒に遊ぶように誘ったり、あと少しで木登りはおしまいにするようにしましたが、ある時「下りたくなったら呼ぶから、先生は行ってもいい」と、言い出しました。最初は氣になり、こちらから何度も出かけては、「下りたい？」と聞いていましたが、下りたい時は必ず、大声で呼ぶか、近くの人を知らせによこしました。庭の中ほどにあるつげの木にチョコンとすわった彼女は、見ているのどかで、安心しているようでした。「友だち関係が開かれていない」という点ばかりを、氣にさせてあげていた私も、「ああ、彼女にもあんない場所が見つかった」と、見ていられるようになりました。

ある時、「せんせーい、できたー」と、大声で叫びながらとんで来ました。彼女は木にぶらさがりながら、一人で下りられるように、工夫したのです。もう登るのも下りるのも、誰の手も借りる必要はありません。つげの木は、完全に彼女の自由になりました。彼女が一人で下りられるようになって、二人で大喜びをしていると、他の子どもたちもつげの木に集まって来て、自分たちも下りられるようにがんばりました。登るのはどの子も上手でしたが、いざ下りるとなると、なかなか勇氣が出ません。一、二の三でとび下りようとして何度もかけ声をかけるのだけれど、どうしても木から足が離れない子もいます。それでも何度目かの「一、二の三」で、ひらりと舞い下りられるようになる子が、一人二人とふえてきました。彼女も、舞い下りられるようになりませんでした。少し離れた所で、ままごとをしていた子どもたちが、手を振ったり、拍手をしたりしました。集団から離れがちな子どもだからといって、その子が何をしたいのか、何をしているのかを、じっくり見ないで、ことを急いで、一緒に遊ぶことばかりに氣をとられていては、いけないのだなと思いました。仲間で遊ばないで、一人でいることの多い子がいる時、もちろん、その原因や理由を保育者はつきとめなくてはいけない。けれども友だち同士で遊んでいる子と同じく、あるいはそれ以上に、その子どもが充実

し、満足していることを見のがさないであげたい。

## 年長組になって

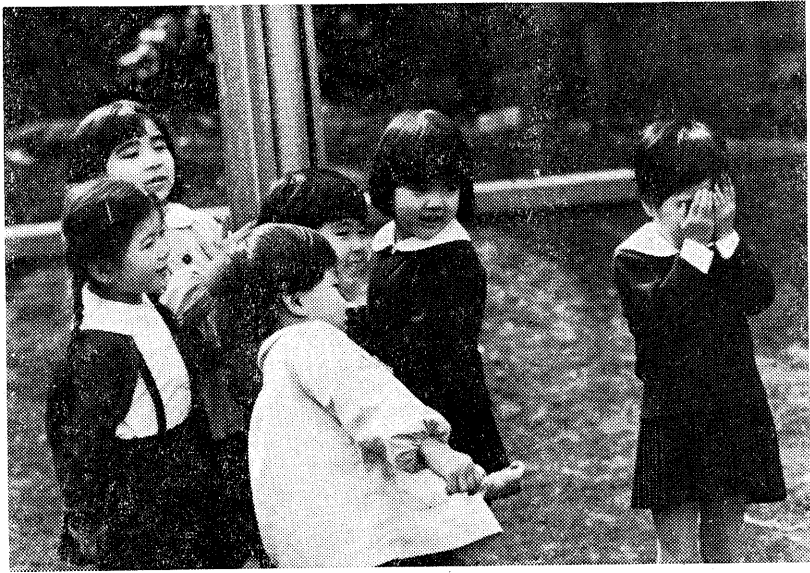
ふじ組からうめ組になり、年長組の生活もしだいに落ちついてきました。私は、迷ったり、困ったり、心配したりで、すべてが順調という訳では決してないのですが、なぜか幼稚園が、楽しくて仕方ありません。子どもたちの活動も、見る見るうちにふくらむようです。

女兒たちの間で、チョウチョの羽作りが大流行しました。赤や黄のきれいな羽をつけて、ピアノに合わせて踊ります。箱に、庭で見つけた花びらをいっぱい入れてきて、蜜を吸ったりして遊びます。いつの間にかハチの羽をつけた子が「今度はハチもひいて」とやって来ます。かんむりをつけると「女王バチ」もできます。「女の子は好きだな」と、眺めて言っている男児も、デビルマンの羽やお面をつけていたりします。登園するなり、ロッカーにしまっておいた自分の羽をつけて遊びだします。バラやツバキの花の精も、つきつきにできます。素敵な魔法のつえを、一日がかりで作ったりします。つきつきにアイデアがとび出し、皆でワイワイ言いながら、作ったり遊んだりするのは本当に楽しいものです。

母の日や父の日にプレゼントを作りました。「ママは指が太いから、大きな指輪にしくちゃ」「パパは、いつも会社に行く時、『手帳ないか』って言ってるから、手帳作ってあげるの』……一生懸命考えてプレゼントができると、今度はそれぞれ工夫して、見つけておいたきれいな箱に入れたり、リボンをかけたり、「こわさないでください」と、はり紙をつけたりして包装します。小さな手で作った小さな包みは、まさに宝物です。

集団で活動することも、ぐんとふえてきます。手つなぎオニや、開戦ドン等のゲームも、自然に人数がふえてきます。ハンカチ落としにしても、以前は仲良しの子同士、落とす人が決まりがちだったのが、男児も女児も入り混ざり、皆で楽しむことができます。あまり友だちと遊ぶのが少ない子どもの所へも、ごく自然にハンカチが落とされます。遊戯室で、ほんの二・三人で始めたすもうも、あつという間に人数も歓声もふえます。年少組のころは、力の余った子どもはただがむしゃらで、また、消極的な子は、いつまでも見る側だったりしたのが、自分たちで順番を決めたり、何人勝ち抜くかと猛然とファイトを燃やします。「おすもうやっています」のはり紙が、遊戯室の入口にはってあったりします。

ままごと遊びも、アイデアがつきつきと練り出します。室内か



ら戸外へ出ることによって、遊びもずっと発展するようです。庭にはえてある雑草を集め、茎から実を削いでお米を作ったり、草を水につけてから砂の中へ入れて「てんぷら」ができ上がります。池にビニール製のさかなを浮かべ、それを釣って、タイヤに木の枝を集めて作ったかまどで焼きます。場所も、すべり台、ジャンダルジム、池のそば、木の根もと等、子どもたちは本当によく工夫して、格好の場所を見いだします。草や木や土が身近にあることは、素晴らしいなとつくづく思います。

十月に初等科の運動会があり、年長組は「旗のダンス」の遊戯を行ないました。見せるためのものを行なうことの意味を問う間もなく、見せるとか、見られることを、あまり意識しないで過してきた子どもたちと保育者は、右往左往しながら練習しました。練習が終わると、急に生き生きとなる子どもたちを見て、自分の指導の至らなさを感じたり、「早く、運動会が終わるといいのに」と、内心思いました。幼稚園よりもずっと広い初等科のグラウンドで、当日が初めての子どもたちが、ポツンと置かれる旗を中心に、円を描けるかしら……こちらの心配をよそに、子どもたちは「大丈夫」と平気な顔をしています。当日、入場門に並び、レコードが鳴り始め、子どもたちは両手に旗を持って行進して行きます。先頭は、あのつげの木の女児です。広いグラウンド

のせいか、なかなか円につながりません。入場門にたたくむらのは、今にも飛び出して行きたい気持ちです。子どもたちも、円ができないのを感じているようです。その時、サッと先頭が中心の旗に近寄って、きれいな円がつながりました。保育者が声をかけて手助けできない所で、自分たちだけでできたのです。レコードに合わせて、皆、一生懸命ダンスをします。いつもふざけていたKちゃんも、Sちゃんも、ちゃんとやっています。「いざやる時なのだ」ということは、どの子どももちゃんと感じていたので、——今でも、この時の舞い踊っていた青い旗の色と、何とも言えない感激を、忘れることができません。

「私の保育」は、まだ模索中です。ただ「一人一人の子どもを大切に」ということは、忘れないようにと思います。未熟な保育者であるうと、模索中であるうと、子どもたちも、日々の生活も、とどまることを知りません。ややもすると、それに押し流される自分を省みて、これからも「私の保育」を求めて行かなければならないと考えます。

(学習院幼稚園)